

滋賀県の特徴

本県は日本列島のほぼ中央に位置し、北は福井県、東は岐阜県、南東は三重県、西は京都府と接しています。

面積は国土の総面積の約1%を占めており、中央には県土の総面積の約6分の1を占める、わが国最大の湖である琵琶湖があり、周囲を伊吹、鈴鹿、比良など1,000mを超える高い山々に囲まれています。

琵琶湖の周辺はこれらの山々から流れ出る大小の河川が扇状地や三角州をつくりながら湖に注ぎ、近江盆地を形成しています。

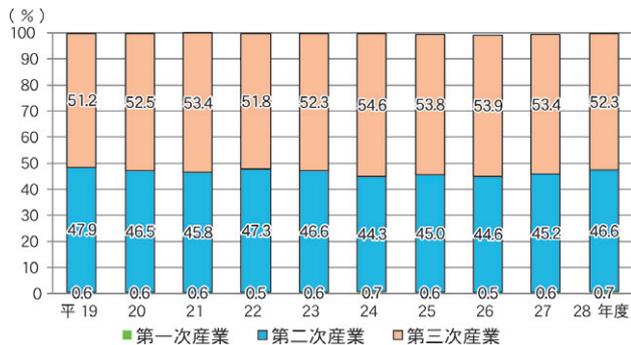


産業構造

< 商工政策課 >

本県は全国有数の内陸工業県であり、県内総生産に占める第二次産業の割合は46.6%となっています。

◆ 県内総生産の構成比の推移



※県内総生産には「輸入品に課される税・関税」「(控除) 総資本形成に係る消費税」が含まれるため、合計は100%とはなりません。
【出典：滋賀県統計課「平成28年度滋賀県民経済計算」】

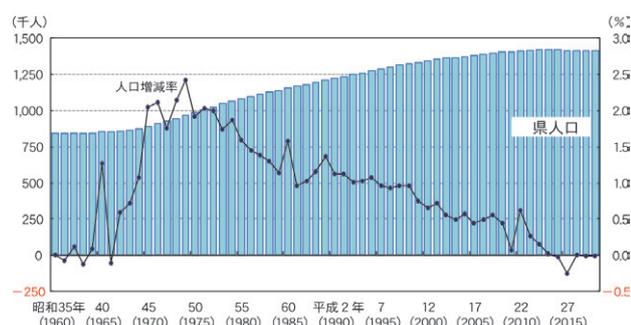
● 人口の変化

< 統計課 >

平成30年(2018年)10月1日現在の県推計人口は1,412,881人です。

この1年間で75人(0.01%)減少しました。

◆ 本県の人口および増加率



【出典：国勢調査および滋賀県毎月人口推計調査結果】

琵琶湖の特徴

< 環境政策課 >

琵琶湖の最も狭くなったところに琵琶湖大橋があり、これより北側を北湖、南側を南湖といい、両者は様々な面で性格が異なっています。

琵琶湖には、大小約450本の河川が流れこみ、瀬田川と人工の琵琶湖疏水から流れ出します。計算上、湖の水が全部入れ替わるには約19年かかります。

琵琶湖は日本最古の湖でもあります。今の湖は100万年以上昔にでき始め、祖先となる湖を含めると440万年もの歴史をもつ世界有数の「古代湖」です。長い歴史と変化に富む環境をもつ琵琶湖は生物相が豊かで、約600種の動物と約500種の植物が生息し、ビワマスやセタシジミなどの固有種も多く見られます。

■ 古代湖

例外的に寿命の長い湖で、多くの固有種が進化する場です。バイカル湖やタンガニイカ湖など、世界中で20ほどの湖が古代湖として知られています。

■ 固有種

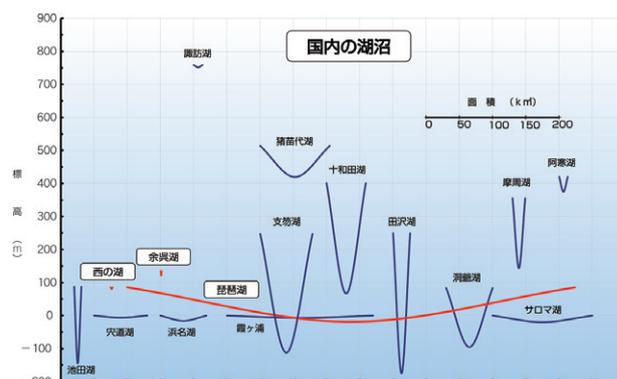
限られた地域・水域にしか分布しない生物のこと。琵琶湖は、日本でも抜きん出て固有種の多い湖で、60種以上が知られています。

◆ 琵琶湖の概要

琵琶湖の集水域	3,174km ²	
琵琶湖の大きさ	面積(※) (北湖:南湖=618.0km ² :50.7km ² ≒12:1)	
	南北の延長	63.49km
	最大幅	22.8km
	最小幅	1.35km
水の深	周囲	235.20km
	最も深いところ	103.58m
貯水量	平均の深さ	41.20m
		275億m ³ (北湖273億m ³ 、南湖2億m ³)

※総面積は、平成29年全国都道府県市区町村別面積調(国土地理院)の数値を引用。北湖と南湖の各面積は、GISデータ(琵琶湖環境科学研究センター)の数値を引用。

◆ 国内のおもな湖沼の特徴(面積、深さ、標高)の比較





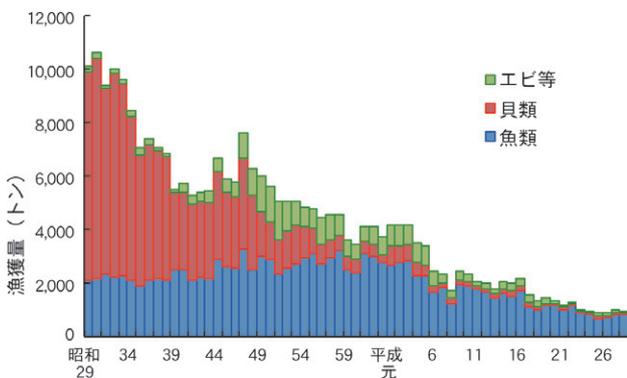
● 水産業の場としての価値

<水産課>

コアユ、ニゴロブナ、ホンモロコ、ビワマスなどの魚類をはじめ、セタシジミ、スジエビなど、平成 29 年（2017 年）には 713（外来魚を除く）トンの水揚げがありました。平成 29 年の漁獲量の減少にはアユ漁の記録的不漁が大きく影響しています。アユ漁は、平成 30 年以降では回復傾向にあります。

琵琶湖の魚介類は独特の漁法で獲られ、ふなずしなどのなれずしや湖魚の佃煮、あめのうお御飯などの伝統食として、本県の産業や食文化を支えています。

◆ 類別漁獲量の推移



● ラムサール条約登録湿地としての価値

<自然環境保全課>

琵琶湖は、平成 5 年（1993 年）に「ラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）」の登録湿地となりました。平成 20 年（2008 年）には、県内最大の内湖である西の湖および長命寺川が拡大登録されました。



ラムサール条約登録湿地（西の湖）

● 観光資源としての価値

<観光振興局>

琵琶湖は 20 箇所を超える水泳場を有するとともに、湖上遊覧、ウォータースポーツなどの場となっています。

また、周辺の美しい自然環境と相まって、本県にとってかけがえのない観光資源であり、滋賀県全体では年間約 5,254 万人の観光客（平成 30 年）が訪れています。



● 学術研究の場としての価値

<環境政策課>

琵琶湖は生物・生態系、湖底遺跡などの学術研究の場となっており、本県の試験研究機関だけでなく、大学なども研究機関を設置し、各種研究を行っています。

● 祈りと暮らしに関わる遺産としての価値

<文化財保護課>

古来、水は穢れを除き、病を癒すものとして祀られてきました。仏教の普及とともに東方の瑠璃色に輝く「水の浄土」の教主である薬師如来が広く信仰され、琵琶湖は「水の浄土」として見立てられました。その周囲には多くの寺社が建立され今日も多くの人々の心を引き付けています。また、琵琶湖の周囲で営まれる人々の暮らしの中には、山から水を引いた古式水道や湧き水を使いながら汚さないルールが伝わっています。湖辺の集落や湖中の島では、鮒ずしなどの独自の食文化やエリなどの漁法が育まれました。水郷や水辺の景観は古くから芸術や庭園に取り上げられ、近年では水と人の営みが調和した文化的景観として現代の人々を引き付けています。

琵琶湖とその水辺景観には日本人の高度な「水の文化」の歴史が集積されています。



竹生島の夕景